玉子王子　著

## 一章　パイズリマイスターのスパイ、玉を握られあえなく逮捕

三〇ほどのパッとしない黒髪の男が歩く。

城壁で囲まれた都市。

正面の城門は何の捻りもない正面から入る門、日本の城のように虎口にはなっていない。

男が門をくぐると大通り、石畳などではない、ただの土道。左右に市場。さほど繁栄していないが、一様多様な商品が売られていた。

籠に入れた魚を天秤棒の左右にぶら下げて歩く男や、敷物の上に絹の巻物を広げて客を呼び込む女、小さな店に置かれた壺の中には香辛料などが入っていた。

貧しい商人が売るものは水である。水はただなので、入れ物だけ確保して町の外から運んでくれば日銭になる。

街ゆく人々の服装は薄っぺらい布か、毛皮。古代と原始時代の間ぐらいに思えた。

男は市場を通り抜け、町の中心の広場を抜け、一際巨大な建物にたどり着く。

この王都うさぎ市を治める王、このうさぎ王国を治める王の住む宮殿。

正面から入ろうとする男を棍棒を持った女が止める。

王の親衛隊の者、衛兵といってもいい。この世界ではそれは軍隊ではなく、文官の一種とみなされる。

「止まれ、ここは王の住まいだぞ」

「ああ、ご苦労」

いって、横を抜けようとする。

「はふっ！」

ヘコ、と突然腰を引く男。股間。女衛兵が手でカップを作り、パンと軽く叩いていた。

にんまりと笑う女。

青ざめ、汗を噴き出しながら女を見上げる男。

――こ、この女、いきなり玉、金カップ、ふ、ふざけやがって……ああああああ、だめだ、力が抜ける。玉だけは、玉だけは無理だ。怒るとか対抗するとか考えるより、まず心が折れる。だって、対抗もくそも、こいつら、玉ないから同じ反撃できないし。女に金的されたら、世界に与えられたら不公平な立ち位置に心折れる……

「くんむううう」

腰を引き、股間を押さえて悶える男。見下ろす女。

「うふふ、私優しいから、軽ーくしてあげたわよ。なのに、どうしたの？　すごく痛そうじゃない？　不思議ねえ、あんな肩たたきぐらいの力で……パン、ってやっただけだよ？　ほら、こんなふうに」

パン、と、むしろ男を叩いた時より力を込めて自分の股間を叩く。毛皮の腰巻はある程度の防御力はあるが、それは男も同じだった。

それでも、なぜか女は男ほどダメージは受けない。というか、まったくダメージを受けない。

衝撃はむしろ強いのに、不思議な話だった。

腰を突き出す女衛兵。

周りから、同僚が集まってくる。

「どうしたの？」

「この人が勝手に宮殿に入ろうとしたから、お腹狙ってパン、ってやったら……ちょっと下に当たっちゃって」

「ぎゃはは、あんた絶対わざとでしょ？」

「腰引いちゃって、かわいいー。どこが痛いのか、お姉さんにいえまちゅか？　恥ずかしいからむりでちゅか？」

これ見よがしに見下し、嘲笑う女衛兵たち。棍棒や丸木弓で武装しているから、非武装の男を見下しているわけではない。

むしろお互い裸のほうが、より見下せるだろう。

彼女らの優位なふるまいの根源は、男女の体の構造の違いからくるのだから。

ようは、弱点がついていない者が、ついている者を見下しているのである。

腰に手をやり、股間を突き出す女たち。

――ほらほら、どう？　同じこと、あんたら男性様にできるかな？　どんな優位に立ってても、こんなふうに腰突き出せないでしょ。ポン、ってやられたらイキり終了だよ？　出せないよねえ、いろいろ、付いてるから。よわーいものがね。

「うううう」

――こ、こいつら、股間突き出して……こっちが同じ反撃できないのを噛み締めてやがるんだ、女の優位を……こいつら、こんなんばっかり……

そういう女ばかりの世界である。

「ともかく、こいつどうする？」

「侵入者兄貴には拷問ですやろ」

「主にゴールド方面に念入りに拷問。私ら素人は拷問のやり方なんか知らないから、それしかできないというね」

「あーいいっすねー」

「くむううう……」

股間を押さえ、腰をグネグネさせる男。

その様をご満悦としか言いようがない笑顔で見下ろす女衛兵たち。

「あー、女でよかったあ」

「女がこんな状態になるのにどのぐらいの打撃受けなきゃならないかな？」

「まあ、そんなすっごい打撃の必要もないだろうけど……「ポン」でこうはならないことは確実に言えるよね」

楽し気に、男が次の行動を起こすのを待つ。普通に考えれば、逃げようとするはずだ。

だが、男は逃げない。

女衛兵の一人が首をかしげる。

「んー、もしかしてお兄さん本当には潰されないと思ってる？　あは、潰れても治っちゃうんだから、ガチ潰しだよー」

玉ぐらい潰れても治る仮想現実的世界である。

手足が千切れようが、生きてさえいれば再生していく世界。

「だから、頑張って逃げるべきじゃない？」

そう、普通なら必死に逃げるべき場面。

だが、男はそうする必要がない。

「お、お忍び解除！」

意味不明の発言。

しかし、意味はある。この仮想現実の世界唯一の「プレイヤー」である水本海治は、いくつかの能力を持たされている。能力というほどではない、戦いが有利になる類ではないが、この世界でフラフラするのに便利な特権とでもいうか。

その一つが「お忍び」だ。

それを使っていれば、彼が彼だと人々に認識されることがない。

「あっ」

女衛兵たちがギョッとする。

「陛下！」

このうさぎ王国の王、水本。

ざっ、と音を立ててその場に跪く女たち。

「ご無礼を！」

「ん……ぐむうううう」

まだ痛い。いや、軽い金カップだったので、動こうと思えば動けるのだ。

女なら何ともなく、男なら急所痛で悶えるというちょうどいい塩梅の力加減、いわゆる「楽しむ金的」だったので。

――動ける、でも、動きたくない……だって、玉が痛すぎるし……

その場で棒立ち。腰を引いて、股間を押さえてグネグネ。

跪いた女たち。

ぷ、と誰かが噴き出す。

「ぷぷぷ、っていうか、まだ痛いんだ」

「しっ、だめだよ」

――そうだぞ、俺は王だ。

「かわいそうでしょ？　おキンキン痛いんだよ？」

――なんだその「だめ」の理由は……

「まあ、正直盛ってると思うけど」

「だよねえ。パン、ってやっただけだよ？　そりゃ男なら痛いぐらい力込めたけどねえ、ダメージ長引きすぎ」

「被害者面してねえ」

「男ってほかの面ではすごい我慢強いのに、タマタマの時はもうほかの時で我慢してる分まで取り戻そうとするみたいにアピッて来るよね」

「マジでそんな痛いのかよー。仮にそうだとしたら、そこまでダメージ受けるもん無防備にぶら下げてるとかデザイン的にどうよ？　って思っちゃうよ」

　跪きながら、クスクス笑う女たち。

　ちらちらと水本を見てくる。

　聞こえているのはわかっている。

　玉の弱さを嘲笑われる男の姿を見て楽しんでいる。

　顔を赤らめるしかない水本。

　――クッソ、腐れマ〇コどもめ！　さっさと宮殿に……入りたいが、動けねえ。いや、無理すりゃ動けるけど……

　ゆっくり歩きだす。股間を押さえつつ。

「お、歩き出した」

「あんよは上手」

「っていうか、やっぱ動けるんじゃん。ダメージ盛ってやがったな」

　跪いたまま、見下ろし金的嘲笑という器用な女たち。

　宮殿の執務室。

　ようやくたどり着き、椅子に座ると秘書室からピンクの髪の幼女が入ってくる。

「いい知らせと悪い知らせ、どっちから聞きたい？」

「じゃ、いい知らせ」

「それじゃ、青銅器の技術開発完了したよ」

　ピンクの髪の幼女フォンティーヌ。

　この世界そのものはある種のデータ上の存在で、幼女はその世界のナビゲーター的な者。

　水本はこの世界で唯一の人間で、いわばプレイヤーといえる。

　水本の国がこの世界を統一すればゲーム――的なシミュレーション――は終了、元の世界に帰れる。

　と、フォンティーヌに聞いて一様それを目指して戦っている。

　ゲーム内時間ですでに数千年。

　一つの開拓者の集まりだった彼の国も今は人口数十万となっていた。

　他国も同じく発展し――他の指導者も開拓団から始め、同じように発展していく形――その中の一つとすでに何千年単位で戦争を続けていた。

　それは全く、彼の手際が悪すぎるために起こっている事だ。今回は初プレイなので敵ＡＩは相当に能力を制限されていて、慣れた人間なら瞬く間に蹴散らしていける程度でしかない。

　それ相手に数千年戦っているのだからほぼほぼ、このプレイは先がないだろう。

ユニットを作るのも、技術開発をするのも、建造物を建てるのも、すべてコストがかかる。使用できるリソースの多くを兵にだけ突っ込み、それをダラダラと失っているうちに、戦っていない他国は国を発展させていっているのだ。

青銅器の技術も、水本の「うさぎ王国」と戦い続けている「アッカド王国」以外の四か国はすでに開発済みの割と古い技術でしかない。

他国が青銅器を使っているのに、棍棒や丸木弓で戦っているうさぎ王国もアッカドも相当まずい状況といえるだろう。立ち遅れてしまっている。

が、とりあえず距離があり、噂程度の交渉しかないので水本はその辺まるで気づいていない。

「青銅があれば鎧兜も作れるし、短剣とか斧とか槍とか、まともな武器が作れるようになるよ。作業も全般的に良くなるし。今は農業も木を切ったりも全部石器だからね」

「夢が広がるねえ」

「で、悪い知らせだけど。領内に銅の生産地がない」

「え？　どういうこと？」

「どうもこうも、そういう事だよ。まあ、ちょっとは取れるところもあるんだけど、それはフレーバーでね、国全体に資源をいきわたらせるには「生産地」が必要なの。これがない。ほら、市場とかで香辛料売ってるでしょ？　アレは香辛料の生産地が国の領土内にあるから供給されてるんだよ。もしそれがなければ、少量は売られてもゲーム的に意味がないという。まあ厳密にこの世界が「ゲーム」かはまた微妙だけど、仮想現実だから。まあゲームみたいなもんだけど」

「なんだよせっかく開発したのに……どこかにないのか？」

「青銅器の技術を開発すれば、他国の銅の産地も見えるようになるよ」

「ん……ああ、本当だ」

支配下にあるユニットの視界に入った場所はマップに記される。それはプレイヤーである水本は見たいと思えば脳裏に浮かぶのだ。

他国内の今まで何もない平地や山地だった場所に、銅の産地を示すアイコンが浮かんで見えていた。

「う、やべえ……アッカドにいくつも銅の産地あるじゃん」

「向こうもそろそろ青銅器ぐらい開発してくるだろうし。開発が終われば資源がある以上、すぐ鉱山作って、青銅の武器で武装した軍隊が攻めてくるね。逆ならまだ勝ち目もあるかもだけど、これはまずいよね」

「逆ならって？」

「あは、だからさあ、青銅器で武装したこっちの男の人たちの軍隊が、棍棒や丸木弓のアッカドの女兵士の軍隊に圧勝できるかって言ったら微妙ってこと。なにせこっちの男の人たちには、かるーい攻撃で「はぐっ！」ってなっちゃうすっごいどうしようもないクソザコ急所ぶら下げてるからね。棍棒で青銅の武器をしのぎつつ、金ちゃん蹴りで仕留めることも可能じゃん。それが、向こうが青銅となるともう話にならないよ」

「いや、そうとも限らないだろ」

「かぎるってー。青銅の武器でボコられた挙句、おチンタマ青銅のナイフでそぎ落とされる未来がはっきり見えるじゃん」

「そぎ落とす必要ねーじゃん！　普通に殺せよ！」

「ぎゃはははは！　だって殺しても生き返ってくるだけだし」

ＡＩたちは死んでも別のユニットとして生き返る。ガワも中身も同じだが「今回は丸木弓兵か」というふうに、立ち位置が変わるわけだ。基本、同じ国に生まれる。

「だから、おニンニン方面にガッツリ女への恐怖を刷り込んでおけば、次の戦いで有利になるから……という建前」

実際のところ、**敵兵たちがドＳ女子だから**というだけの話だろう。

兵隊は、指導者と同じ性別だ。他の五か国はみな指導者が女たちなので、兵も女ばかり。

うさぎ王国は男の兵士なので、単純な体力腕力体格では有利だ。多少個人差はあるが、平均的な男は平均的な女を圧倒できる。体格の差は二割かそこらだろうが、腕力は数倍の差があるだろう。

棍棒で争う世界でそれなら、圧倒的有利と思える。

だが実際には違った。

女兵士たちは、自分たちにはない男の弱点を集中的に狙ってくるのだ。趣味と実益で、もう本当に集中的に。

急所攻撃なしだと男兵士のほうが圧倒的に強いが、急所攻撃込みだと互角か、むしろ不利な気がする。一瞬の隙を突かれて軽く爪先で押すように蹴られてもまともに動けなくなる。その隙に頭を叩き割られて逆転負けなどこの数千年のアッカドとの戦いでは限りなく起こっている。

――っていうか、もはやその負け方は「逆転」なのかってレベルだ。**女のほうが強いから順当に勝ってる**ってだけじゃねえの？　と思っちまうよ。

キュ、と股間が縮む。水本のそれは並外れて小さい。世界最小と噂される。

そういう話が出ると、いつもフォンティーヌは慰めてくれる。世界中探せば二三本は同レベルの極小一物も見つかるだろうと。

もちろん全く慰めになっていないし、彼女もそれはわかっている。

彼女もまた、一人のドＳ女子なのだった。

頭を抱える水本。

「ああ、ヤベえよ、ヤベえよ……ただでさえ女どもの容赦のないキ〇タマ蹴りで、武装が同じでも男のほうが不利だってのに……武器で負けたら終わりじゃん」

「というか、ぶら下げて生まれた時点で終わっていたというね」

「んー」

目を瞑る。マップを見る。

うさぎ王国は、七つの「中核都市」で構成されている。中核都市は開拓団によって生み出された町で、生産や領土主張の中心となる。中核都市が発達すると、周辺に小さな町や農村が生まれる。影響が及ぶ範囲が広がり、領土となる。他国のユニットの侵入を拒否したり、内側の資源を使用する権利が生まれる。

中核都市を奪われるとそれの所有権も敵側に移る。

うさぎ王国は実は一〇個の中核都市を建設したのだが、いくつかアッカドに奪われてしまった。現在七つの都市を持つ。

アッカドの方も一〇個作り、いくつか奪って都合一三だ。

妙な表現に思えるかもしれない。うさぎ王国は一〇個作り、今七つなのだから三つ奪われただけに見える。

だが実際は違う、うさぎ王国の都市はすべてが自国で作ったものではない。自国で作ったものが五つ、奪ったものが二つで合計七つだ。

アッカドは自国で作ったもの八個にうさぎ王国が作ったもの五つで合計一三。まあどうでもいい話だが。

「あっ！　ライオン市見てくれよ！」

「ひどい名前だよねえ……うちの中核都市は動物の名前ばっかり」

言いつつ、フォンティーヌも目を瞑る。

ライオン市はうさぎ王国とアッカドの境界辺りにあったうさぎ王国側の都市だったが、千年前の戦いで奪われていた。

敵の領土はマップにはちゃんと見えない。最後に確認したデータ準拠の映像だけだ。しかし新たに技術を開発し、資源が見えるようになればそれは見える。

ライオン市の近くの山に、銅を示すアイコンが浮かんで見えた。

「あ、銅があるじゃん。あーあー、奪われなきゃ使えたのに」

「ここを取り返そう」

いまや、うさぎ王国の兵力は三万五千。中核都市一つに月五千の割り当て。

一方、アッカド王国は中核都市一つに四千人の割り当てで五万二千。

アッカド王国は兵力でうさぎ王国を圧倒しつつ、軍事以外にもうさぎ王国より多くの資源を配分できる――税率が同じでも都市一つにつき兵千人分のリソースを他に回せる。

――あーあ、コレほんとに負けムードだよねえ。でも、全体としてはうちの兵力も増えてるからあまり悲壮感はない。ちょっと違うけど、わりと「茹でカエル」っぽいような。

「中核都市一つにつき、二千ずつ兵を増やす。都合四万九千」

敵は五万二千なんだから、まだ足りないでしょう、とは言わないフォンティーヌ。

全力をうさぎ王国国境に向けてくるわけもない。アッカドは他国とも緊張状態はあるのだ。

その点、うさぎ王国は多少は恵まれていた。一番近いのがアッカド、次がカイロという国。

カイロとの間には多少距離があり、まだ領土が接していない。

ちなみに、カイロ王国は中核都市が十五個である。他の国も同じ。うさぎ王国とアッカドはもつれあい、足を引っ張り合っていたので十個ずつしか作れなかった。

それでも、相手を丸ごと取り込めば一挙に中核都市二十個でトップ……といえなくもない。

まあ、占領統治の問題とか、技術とかいろいろ、キャッチアップの必要はあるだろうが。

「一都市七千かー、きついねえ」

「そして、そのすべてを国境に突っ込む」

「他国はまあまだ来ないとしても、軍がいなくなると治安が下がって良くないよ」

「平気平気、最後は勝つ」

部屋の外の女衛兵たちが顔を見合わせる。

「すごい自信ね」

「結構頼もしいよね、チン〇ンこんなんなのに」

人差し指と親指で輪を作り。いや、少しだけ空いている。

噴き出す他の女衛兵。

「そこまで小さくないでしょ。小指ぐらいはあったよ」

結構水本と関係している女衛兵たち。ゲーム内時間で建国から数千年経っている。ＡＩたちは全員二十歳で固定されており、年を取ることはない。早い段階で雇用されていた者は水本との付き合いも何千年となるのだ。ずぶずぶでも何の不思議もない。

人が増えると、死んで復活待ちのＡＩが充当され、それがいないと新たなＡＩが生まれる。

同じ女衛兵でも、若い者は数百年しか生きていない者もいる。

外に出ればもっと多様である、今日現れた人間――というかＡＩだが、体も内面も人間と変わらない――も結構いるのだ。

人口が右肩上がりで増えていく間は、新人ＡＩも増えていくだろう。

ともかく、動員が始まる。

各中核都市に鮫戦士と呼ばれる棍棒兵と丸木弓兵を編成する命令が下る。

同時に、諜報員がライオン市に送り込まれることとなった。

シブラという名の、背の低い男だった。

王宮で水本から命を受け、商人に扮してアッカドとの国境に向かう。

アッカド側に入り、道沿いにある街の一つに入る。

中核都市ではない、近くの中核都市が発展してくると出てくる周辺都市だ。

その一つの宿屋。

酒場で飲む。横に女が寄ってくる。店の店員でもあり、春も売る女はつきものだ。

顔はパッとしないが、服の胸元が開いており、寄せる必要もなくしっかり谷間のできる巨乳が覗いていた。

交渉し、部屋に入る。

「うふふ、お客さん、見る目あるよ」

服を脱ぎ捨てる。顔より大きな乳房。

「おお、すごいな」

「お客さんの方は？」

「そうだな、俺は……」

背を向け、全裸になる。そして足を開く。

尻を向けてだ。

しかし女の目には男のものがしっかり映る。

「おおっ、す、すごい……お客さんすっごいの持ってるわねえ。超巨根じゃない。うふ、チビのデ〇マラって本当……あ」

「まあ、背は低いよ」

しかし、諜報員として訓練され、並みの戦士よりは強い。

拷問の訓練も受けていて、万が一捕まっても一か月耐える自信がある。

訓練、といっても、実際訓練を受けたわけではない。諜報員ユニットはそういうある種の背景をもって生まれてくるという事だ。

彼自身、「訓練をしていた時間」が実際に存在しないことはわかっているが、とはいえ知識としてはその訓練が頭に入っている。ＡＩの内面はなかなか複雑だ。

一か月耐える、というのは、この世界では一か月以上スパイ等を拘束できないためだ。そういう縛りがないと、怪我をしても死なないし餓死もしない世界なので延々何千年も拘束されることになりかねない。

そういうことにならないための救済システムだ。

だかが一か月我慢比べとなる。耐え抜けば死んで終わり。別のユニットに生まれ変わることになる。

――捕まる気はないがな。

「千年ぐらいこの仕事してるけど……一番立派な部類よ、それ」

「そうか？」

振り返る。小柄だが鍛えた体。太ももの間に赤子の腕のような一物がぶらーり。肉玉もずっしりと鶏卵を超えるサイズ。

「おおお」

「ははは、ほらほら」

「おおっ！　もうっ、すっごいおっきい！」

ある程度のサイズがあれば一物をプロペラのように回せるものだが、高速回転はなかなか大変だ。

しかしシブラほどになると軽く動くだけでブンブン回転させられた。

　目を輝かす女。

「うふ、いいわねえ。お金、安くするわよ」

　いいつつ近づく。一物を止め、抱き着くシブラ。濃厚なキスの後、ギン立ちの巨根をまずは爆乳に挟み込む。女は慣れた手つきでブルンブルンと振動させ、爆乳パイズリ。

「あは、私のからこんなに出ちゃう人、まずいないよ」

「少しはいるんだな」

「そりゃ千年やってりゃね。おチン〇ンが立派だとテンション上がるよ。これが粗チンだと……うふふ、うさぎ王国の王って、超小さいんだって？」

「前に付き合った女がやったことあるらしいけど、俺のと比べたら別の臓器だって」

「大体の人のは、別の臓器だと思うよ。そういえば、前に付き合った人がうさぎ王国のスパイでね」

「え？」

「立派なチン〇ンしてた。もしかしたら、あなたも？」

「馬鹿、チ〇ポで選んでるんじゃないんだから」

「うふ、だよねえ。でもここだけの話、私ももともとうさぎ王国の人間でね」

　この街が属する中核都市は、元々うさぎ王国が作ったものである。住人は元々うさぎ王国の人間だったものと、あとからアッカドから来たものが混在している。

「正直、女が治めるとか無理あると思うんだ。っていうか、女が戦争に送られるとかどうよ？　そういう危ない事は……ちゅぶ」

「あふ」

　スイカ二つの真ん丸爆乳の谷間からでた巨棒の先に口づけ、音をわざと立ててしゃぶる。

　仰け反るシブラ。

「ふおおおお」

「ちゅぶっ、うふふ、危ないことは、立派な武器をぶら下げた、勇敢な男性様に押し付けるのが女の知恵ってもんでしょうが」

「ああ、そうだよな……で、そろそろ」

「ああ、とりあえず出しちゃう？　オッパイに？」

「パイズリするからには、谷間に出すだろ、それが**パイズラー**の宿命。出すのはマ〇コ、とかやられると萎えるという人間も多いらしいぞ。やっぱり一発二発谷間に流すのが**パイズリマイスター**だろ」

「金の玉まで立派でおっきーから言える余裕のセリフだね。一度に一発の人たちじゃ、マンマンに決め打ち一択だよ。それそれー」

「はふううう」

　――こいつ上手い、パイズリうまい……さすがデカパイだ、慣れてる。やる男全員にパイズリせがまれて千年……そりゃ**パイズリの鬼**に成長するわな。ああ。

　タプタプタプタプ、優しく揉み上げ、時に勢いよくシュッシュッシュと上下させて擦る。

「ああん、棒が長いから、やりやすいよ。あの人の大きいの思い出す。手伝ったんだ、いろいろ。あなたもスパイだったら、手伝ってあげたのに」

「ん……実は、俺もスパイなんだ。協力してくれないか」

「えー、あはは、この話すると、皆「俺もスパイ」っていうのよ。ねえ、まあ、信じるけどさ」
「ただマンのために言ってる男が大半だろうな。だってこんな……お前、最高のオッパイしてるし」
「うふ、ありがとう」
「でも俺は本物だぞ。その男もできたと思うけど……」
　スイカップに指を押し付け、動かす。文字を書いて見せる。
　文字を書くのは、古代社会では特殊技能だ。官僚やスパイぐらいしかできない。
「わ、文字じゃない」
「そう、前の男も書けただろ？」
「うふ、久しぶりに引っかかったわね」
「え、はうっ！」
　ぎゅむ。
　爆乳の下に手を入れ、無防備に垂れ下がる鶏卵の根元を掴む女。
「な、なにをおおおおおおおお！」
　ぎゅうううううううう、と肉玉二つを女の力で思いきり圧縮、握り潰す。
「おおおおお、やめ、ああああ」
　真っ青で膝を締め、掴みかかるシブラ。
　握り潰しをやめ、飛んで離れる爆乳女。
「く、くううう、お前」
　股間を押さえ、一瞬で粘つく汗を全身から噴き出す。
　その鼻づらに、パンとジャブ。
「ぐっ」
　鼻血、思わず顔を押さえる。と、空いた股間に爆乳女の足の甲がパシンと直撃。
「あがっ！」
「はい、きんてーき。おっ」
　どぶ、と立ったままの巨棒が仰け反り、白濁液を噴き出す。
「あは、やだあ。キ〇タマ蹴られていっちゃった。変態じゃん。ドM君がチン〇ン無駄にデカいってほんとねえ……本当に……」
　近づき、膝。
「無駄チ〇ポ！」
「ぐがっ！」
　グチョ、と縮み上がって腰にへばりついていた両睾丸が女の膝に圧し潰されて破裂する。
　巨棒を反り立たせたまま、膝をつくシブラ。見下ろす女。
「うふふ、腰骨と膝の骨で挟んでタマタマを潰すガチ去勢の膝金。ダメージデカいでしょうね。あは、もう一桁」
　デジタルで構成された、ＨＰが設定された世界。数字とバーでそれが見える世界である。
　常に見えているのではなく、攻撃したりされたりすれば見える。
　常に見えていたら、爆乳女のＨＰもただの町人よりはるかに多いことが分かっただろう。

　シブラのそれも相当多かったが、金握り、金的蹴り、膝金で去勢と度重なる急所攻撃で瞬く間に削られ、もはや一発小突かれたら即死の状況である。

　泡を吹き、白目を剥いて倒れる。

「うふふ、男ってどうしようもないわねえ。チン〇ン立ってたらＩＱ十分の一になるんじゃない？そして、この人も相当鍛えてたんでしょうに、金ちゃんを狙われると戦闘力百分の一も同然のクソザコに。男って、大変ねー」

　ぺし、と軽く巨棒を爪先で蹴る女。蹴るというより馬鹿にして触る程度。蹴ったらもう即死するヒットポイントしか残っていないのだ。

「ま、大変なのはこれからだけどね。うふふ、私の仲間にタップリかわいがってもらいなさい」

体験版終わり

続きは製品版でぜひお楽しみください